

サラリーマンの僕は人生において不幸続き。

厄年のお祓いを受けた帰り道、後をつけてきた疫病神と成り行きで一緒に暮らす事になる。

最初は仲良くやっていた二人だが疫病神の身勝手な行動にキレた僕はとうとう疫病神を追い払う。

それで僕は幸せになれるはずだったのだが・・・

## おかえり疫病神

登場人物

僕 しがないサラリーマン。人並みの幸せを求めるが要領が悪くいつも不幸に見舞われる。

疫病神 僕がお祓いを受けたら突然現れた神様。成り行きで僕と一緒に暮らす事になる。

神主 僕のお祓いをする。

○僕の部屋 キッチン 夕方

冷蔵庫の故障で溶けてしまったアイスを流しに捨てているところに電話がかかってくる。

僕「えっ発送した商品の個数が間違っていましたか？スママセン今すぐ会社に戻って確認します」

○神社 午前中

僕は疫払いのお祓いを受けている。

神主「かしこみかしこみ…」

ナレーション（僕）「最近、本当に運が悪い。仕事でも失敗続き 冷蔵庫は壊れてアイスは溶けるし何かに呪われているのかなあ。」

○神社からの帰り道 昼

お祓いから家に戻る途中で何故か背後が気になり振り返る僕。

厄病神登場、振り返ると歩みを止める厄病神、

二度ほど同じ事を繰り返す。

僕「君は誰？何か用なの？」

疫病神「お、おいらは厄病神です。」

僕「厄病神？ところで僕に付いて来るのさ？」

疫病神「今日、これから行くところが無くて、、良かったら今晚泊めて欲しいんだけど？」

僕「うーん、困ったなあ、だけど何だか君の事は他人のような気がしないんだよなあ…」  
疫病神「そりやそうだよ。ついさっきまでずっと一緒だったんだから。」

僕「じゃあ行き先が見つかるまでだからね。行き先が決まったらサッサと出て行ってくれよ。」

疫病神「ありがとう。」

○コンビニ 昼

僕はお弁当を1個買う。

○僕の部屋 ダイニング 昼

僕「人でお弁当を食べようとすると横から厄病神が覗き込んできて  
疫病神「美味しそうだねえ」」

僕「なに？」

(怪訝な顔で)

疫病神「お弁当本当に美味しそうだねえ」

僕「お腹空いてんの？」

疫病神「うん！」

(嬉しそうな顔で頷く)

お弁当をお弁当のフタに半分、分けてやる事にする。

疫病神「ところでさあ、今日は♡人が出会った訳だよ？」

僕「そうだね。」

疫病神「したら今夜は歓迎会という事で♡人で呑みに行こうよ。」

僕「別に歓迎なんかしてないけど。歓迎会よりサツサと次のところ探して欲しいんだけどな。」

疫病神「あらためてもう一度自己紹介するけど、おいらは厄病神だからね。貧乏神じゃ無いんだからそんなケチ臭いこと言わないでさあ。今夜くらいパーッと行こうよパーッと！ なんなら送別会でもいいや。君と別れてこれからは別々にやっていくんだから。」

○居酒屋 夜

僕と疫病神が2人で向き合って座っている。

疫病神「カンパーイ、いやあ君は良く頑張った。数々の不幸にもめげずに今まで良く頑張ったよ。」

僕「全部君のせいだよ。」

疫病神「うん、だからね、これからはきつと幸せになるよ。」

それで1つだけ言っておきたいんだ。幸せってモノはすぐ気がつきにくいものなんだよ。そして大抵は失った時に初めて気がつくんだ。」

僕「厄病神のお説教なんて聞きたく無いよ。君が居なくなれば、宝クジに当たって、カワイイ彼女が出来て、仕事でも怒られなくて、そうだ会社を休んで彼女と2人で海外旅行とかに行きたいなあ」

疫病神「君の幸せは全部外からやってくるモンなんだね。」

僕「いけない？君のせいで彼女もできず仕事もミスばかりで出世もできないし楽しい事なんて何も無かったんだから夢くらい語ってもいいよね。それとも僕が幸せになる事に何か文句でもあるのかい？」

疫病神「無い無い、無いよ。おいらは君が幸せになる為だったら何でも協力するつも

りだよ。」

僕「イヤイヤ、何も協力しなくていいから早く次の行き先を決めて出て行ってくれよ。」

○僕の部屋 寝室 朝

床に寝そべってマンガを読んでいる疫病神

僕「それじゃあこれから会社に行ってくるよ。あつ、忘れてた。これはお昼のお弁当代500円、次の行き先探しちゃんとやらなきゃダメだよ。」

疫病神「分かっているって、だけどこのマンガ面白いね。これ読み終わったら探すから、いつてらっしゃい〜」

○僕の部屋 寝室 夕方

僕「もう、本当に出て行ってもらう事に決めたよ。君はこの一週間出て行く出て行くって言いながら一日中マンガを読んでゴロゴロしてるだけだったじゃないか？本当に我慢ならないから出て行ってくれないかな？」

疫病神「ああ、ようやく君は幸せになる為に自分から行動が出来るようになったんだね。僕は本当に嬉しいよ。」

僕「そんな屁理屈にはもう引つかからないぞ。話し合う事は何も無いからサッサと出て行けよ！」

疫病神「これで本当にお別れだね。バイバイ」

○僕の家 玄関（外から）夕方

家から出て行く疫病神。しばらくして僕は後を追うがもうそこには疫病神の姿は無い。

○僕の部屋 灯の灯っていない部屋 夕方

会社から戻った僕 誰も居ない部屋に向かって

僕「おーい、疫病神いる？居ないよね・・・」

○僕の部屋 土曜日の午前中

部屋の掃除をしている僕、部屋の隅に見覚えの無い封筒が落ちている事に気づく。中には数枚の宝くじと手紙。

疫病神「宝くじも買わなきゃ当たらないよ。クジが当たったらまた二人で呑みに行きたかったけどおいらが居ると当たらないだろうから当日までには出て行きます。カワイイ彼女早く見つかるといいね！」

○宝くじ屋の前 昼

(僕) ナレーション「結局、疫病神の買って来た宝くじは全てハズレだった。ただ、買いだめしていたクジ付きのアイスが一本だけ当たっていた。」

ブルン、バイクのエンジンをかける僕、オートバイにまたがり走り出す。

一瞬、バイクのミラーに疫病神の姿が映る。

僕の後ろに跨る疫病神の姿。

僕は気づかないままオートバイが画面の奥に消える。

○僕の家

突然玄関のドアが開く。

僕「おかえり、疫病神」

完